

英語Ⅳ（後期）映画・音楽コースの概要とその考察

岩下 いずみ*

On English IV (Movies and Songs Course): General Outlines and Study

Izumi Iwashita*

Abstract: In a course held in the second term of 2009 for the fourth year students, movies and songs in English are mainly taken for the materials aiming at further development of English after learning for three years at National Technical College. In this study, I will explain how the course proceeded and what the main contents were mainly with results of questionnaire about the course and the analysis. This includes students' resumes, presentations, and responses. For the future development of this course, the results will be analyzed minutely at the end of this study.

キーワード: 英語Ⅳ, 映画と音楽

Keywords: English IV, Movies and Songs

1. はじめに：これまでの英語Ⅳ

熊本高専八代キャンパス（旧八代高専）英語Ⅳでは、筆者が赴任した平成18年度には前期はTOEIC習熟を主な目的とした科ごとの授業、後期からは学生の希望に基づいてコースごとの授業が行われていた。筆者は赴任後から英語Ⅳの授業を継続して受け持っており、主に映画・音楽を題材に包括的な英語力伸長を目指して授業を実施してきた。

コースは例年5つに分かれ、主に英会話、英作文、TOEIC、資格試験（TOEIC以外）で実施されることがほとんどである。前述したとおり、前期末試験の時期に学生から希望調査を取り、第一、第二希望まで調査した上でいずれかのコースに入れるように調整している。こうした配慮から、学生は自分が学習したい内容に対して高いモチベーションを持ってコースごとの授業に取り組み、また科ごとではない混合授業である程度の緊張感を持って英語を学べるメリットがあると英語科では考え、継続してこの形式を取っている。希望者多数のコースもあるので、例年調査を二回は取り希望者多数のコースから比較的希望者が少ないコースへの移動を勧めるなどの調整はおこなっている。この場合も生徒数が少ないコースではよりきめ細かい教員からの指導が期待できることから、教育的見地からも妥当な調整だと考える。

また安直な選択を避けるために調査を取る期間中はコース内容のみを明示して各担当教員は学生には知らせないようにしているのも継続して取っている教育的工夫であると言えるだろう。

2. なぜ「映画・音楽」なのか

第一に学生にとって身近であり興味がある題材であることは言うまでもないことである。それを反映してか、毎年このコースは多い時には100名近い希望者が出る。中には「題材が簡単そうだから」という安直な選択の学生もいることももちろん考えられる。しかし、そうした題材を用いて学ぶことは学生自身が積極的になることが期待され、また英語の定着もそれに伴って容易に、かつしっかりとされるだろう。さらに、学生との実際の会話の中からも筆者は工学系の学生の文化的活動の一端や、工学への興味と共に文学作品や映画、音楽への興味が強いことも日々感じている。

「映画・音楽」では実際に使われている生の英語にきわめて近い英語が用いられているという利点もある。また表現も、たとえばTOEICで主に扱われているビジネス英語よりも幅広く、学生が実際に用いる場合、またビジネス以外の日常会話でも等身大であると言えるものが多い。

次に筆者が重要だと考えるのは、「映画・音楽」という題材が、学生が将来どのような職種に就くのか、またどのような人生を送るのかに関係なくおそらく誰しもが触れる機会があるという側面である。こうした側面により生涯を通じて「映画・音楽」を通して英語に触れる機会を作る契機となることを期待して題材を選んでいる。また、英語だけでなく文化的理解なども「映画・音楽」から学ぶことができる広がりがあり、そこからさらなるモチベーションアップが考えられる。

以上のような複合的理由から筆者は「映画・音楽」コースを英語Ⅳ後期で継続的に実施している。

* 共通教育科

〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627

Dept. of Liberal Studies,

2627 Hirayama, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan 866-8501

3. 実際の授業の流れ

3.1 ガイダンスでの説明

ガイダンスは、後期授業一回目後半の40分あまりを用いて行われる(前半は夏季休業課題試験を科ごとに実施)。学生にコース名簿を提示、指定教室に移動した後、プリントを配布して授業概略、進行日程、留意事項などを説明する。平成21年度のコース受講者は、36名であった(内訳M科:8名、E科:12名、C科:10名、B科:6名、男子:25名、女子:9名)。実施教室は、AV設備が整っており、大スクリーンも設置されている一階合同講義室である。なお、一階合同講義室は36名の受講者に対して大きすぎるので、教員が二回目から主に名簿順で座席を指定し、教室前方に一席おきに着席して授業に集中できるようにした。

学生に対してのコース受講の留意事項として、「映画・音楽」を題材にした授業ではあるが、その「知識」を問うものではなく、あくまで英語の力を伸ばしていくことを主眼にしていること、また題材がぐくだけたものであることからいって、授業中の私語や逸脱行為がないようにしてほしいことを学生には伝えた。

授業概略は、「音楽」の分野ではグループごとの一回のプレゼンテーションを課することを明示する。グループは4~5人で自由に組ませ、提示された授業日の中から希望日を考えてもらう。プレゼンテーションでは、各グループが一曲を選び、教員が用意したプリントに提示された必ず盛り込むべきポイントおよび留意事項に注意して協力してプレゼンテーション準備と実施を行ってもらう。

ちなみに洋楽と言われてもなかなか曲が決まらない、あまり洋楽を知らない、というグループに対して以下のようなCDとリーフレット(付属の歌詞カード)を準備して教員が教室に持参した。

教員が準備したCDリスト

ABBA Gold Greatest Hits (ABBA)
O, Yeah! Ultimate Aerosmith Hits (Aerosmith)
1 (The Beatles)
Twenty-two Hits of The Carpenters (The Carpenters)
International SuperHits! (Green Day)
The Essential Michael Jackson (Michael Jackson)
Celebration (Madonna)
Stop the Clocks (Oasis)
Jewels (Queen)

CD選びで配慮したのは、学生の世代においてもCMや映画主題歌などで比較的良好に知られているアーティスト、バンド、曲を含むもの、英語学習や文化理解において有益であろうと考えられるものというポイントである。ベストアルバムばかりにしたのも、知られている曲が凝縮されているからという点と、少ないCDの中からできるだけたくさんのヴァリエーションを作りたいという思いからである。も

ちろん、過去の授業で学生の嗜好をリサーチした結果もできるだけ盛り込むようにした。

また、教員が準備したCDからでなく自分たちで曲を選ぶという学生に対しても「できるだけ英語のネイティブスピーカーが歌っている曲」、「授業で扱うのに適した内容」、「英語の聞き取りに適した歌詞内容、難易度であること」に気をつけて選ぶように指示した。少ないガイダンス時間の中で希望日程、希望曲まで決められるグループは約3分の2ほどだったが、「希望曲はあらかじめ決めておかないと、扱おうと思っていた曲を他のグループが先に発表されて困ることがあるので次の授業までには決めて教員に伝える」ように指示した。

映画の分野では、実際の映画のワンシーンからの台詞のディクテーション、その映画に関してのリーディング教材の読解などをメインに行うことを説明する。映画を一本授業内で観ることは時間的に不可能なので、授業で一部のみ観て残りの部分は放課後の「映画鑑賞会」で自由参加によって観てもらうことを伝える。もちろん個人で鑑賞してもらうことや、授業に差し支えない範囲でDVDを貸し出して鑑賞してもらうこともできる。「映画鑑賞会」の参加によって、自主学习として評価点に入れることも説明した。

映画の選択においては過去の授業では学生の希望によって扱う映画を決めたこともあったが、なかなか希望が集約できない、また逆に学生が過去に観たことのある好きな映画に偏ってしまうという傾向が強かった。よって学生の世代ではなかなか観ることがないのではないのかという比較的古い作品、カルト的作品、ハリウッド映画以外の作品、普遍的な味わいを持つ作品、歴史的・文化的背景を学べる作品などという視点で教員が映画を選ぶことにした。

以上の映画・音楽に関する教材はすべてハンドアウトとする。

その他、英語力伸張の継続的な基盤固めとして、前期より学習していた単語教材『DUO Select』をそのまま学習形態、テスト形式を引き継いで扱うことを説明する。『DUO Select』については、以前より「映画・音楽コース」で同様の形式で実施を継続しているが、これは授業で扱う映画・音楽に実際に出てくる単語や熟語が『DUO Select』でも扱われていることもしばしばあり、学生が実際の英語を単語教材の英語のつながりを実感できるからでもある。

成績については、平常点20%、試験点80%と確認し、平常点にはプレゼンテーション評価、『DUO Select』小テスト及びまとめテスト点数、提出物などが入ることを説明する。

3.2 プレゼンテーションでの注意および配慮点

ガイダンスの際、受講者36名から9グループが作られた。授業回数はガイダンス、二回の定期試験、学年末の試験返却を除くと12回なので、プレゼンテーションがない授業回では教員が曲などを準備した。

ガイダンスにおいて、学生に伝えた主な点は以下のとおりである。

- ・発表グループは、予定日の前日（水曜）お昼休みまでに「岩下教員室」（一般棟3階）に配布プリント原稿、もしくはデータの入ったUSBメモリ（タイトルは「英語Ⅳ」発表原稿）を持参する。不在の場合は、ポストに入れておく。
- ・間に合わなかったグループは、自己負担でプリントしてもらおうことになるので、締切厳守すること。
- ・発表原稿作り、発表はそれぞれ分担しておこなうこと。

発表グループは担当回の授業実施において大きな責任があるので、原稿や曲が入っている媒体を締切りに間に合うよう準備して教員に提出することは必ず守るように第一に厳命した。また、4～5人のグループで協力して作業を分配し、発表時は全員で教室前方の指定された場所に着席してプレゼンテーションが行いやすいように、また評価者が誰がプレゼンテーションをしているのか分かりやすいようにした。発表原稿の中には歌詞の訳も含まれ、歌詞カードや各種サイトなどを利用しても良いが「丸写し」は決してしないように伝え、参考にしたものはすべて明示するように指示した。

そのほかガイダンス時に教員が学生に示した細かな注意点を例と共に挙げる。

教員が示したプレゼンテーション原稿例

(プレゼンテーション参考例)
*の下線部は説明になります。

Stand by Me by Ben. E. King (1961)

*曲名、アーティスト名、リリース年の順に大きめに。選ぶ曲は「英語の授業で扱うのにふさわしいもの」
(発表者) * グループ名、学科、出席番号順に

(Lyrics)
When the night has come
And the land is 1
And the moon is the only light we'll see
No, I won't be afraid
No, I won't be afraid
Just 2 3 as you stand
Stand by me (以下略)
(訳詞)
夜のとばりが下り
大地が真っ暗になって
月だけが目に見える光になっても
怖くはないよ
そう 怖くはないさ
君がそばにいてくれるなら
そばにいて
(以下略)
(参考：歌詞カード、英和辞書、エキサイト翻訳)
*歌詞カードなどで歌詞を調べ、書きおこす。
*聞き取り箇所を5～10個作る。選ぶのは、英語として聞き取りにくいところで、かつ基本的な単語が望ましい。歌の中で繰り返される箇所も良いでしょう。
*訳詞は、歌詞カード(英和辞書、ネットの翻訳サイト、

個人作の訳詞など)を参考に、必ず自分たちで考えて作成してください。また、参考にしたものを必ず明記すること。丸写しは厳禁！判明した場合、評価は0とする。

(曲について)

この曲は、もともと1961年にリリースされたベン・E・キングのセカンド・ソロ・シングルだった。数々のアーティストによってカバーもされており、ジョン・レノンによるカバーは特に有名である。…(以下略)

(参考：Yahoo!ミュージック) * 参考を必ず出す
(担当者名)

(ベン・E・キングについて)

本名 Benjamin Earl Nelson。1938年ノースカロライナ州生まれ。1958年リードシンガーとしてドリフターズに加入。『ラスト・ダンスは私に』などのヒットの後1960年にソロ転向。…(以下略)

(参考：Wikipedia) * 参考を必ず出す
(担当者名)

(感想)

歌詞もわかりやすく素直にいい曲だなと思った。カバーされるのはやはりいい曲の証明だと思う。歌詞について、自然の描写が多いところが、誰でも感情移入できるカギになるのかもしれない。…(以下略)

(担当：全員)

*感想については、全員で話し合ってください。

以上、かなり細かくガイダンスで原稿内容などについて説明することで学生のプレゼンテーションにおける負担(何をどの程度扱えばいいのかわからないなど)を軽減できるようにした。また何か質問などがあれば教員にメールで積極的にコンタクトをとるように促した。

一方、プレゼンテーションの評価は発表者以外が以下のような内容からおこなうものとした。

評価シートの内容

評価者：4-[]科()号：氏名

4()科 ()グループ

1. 発表原稿について

工夫	3	2	1
歌詞の穴埋め箇所の適切さ	3	2	1
協力度	3	2	1

2. 発表態度について

声の大きさ	3	2	1
内容を効果的に伝えているか	3	2	1

3. コメント

評価者の評価結果を総合されて成績の一部となることをしっかりと説明し、決して安易に評価をしないよう評価者の氏名も明記させるようにし、自由コメントも必ず書くように指示した。

4. 授業実践

4.1 各項目における時間配分と内容

実際の授業での大まかな時間配分は次のとおりである。

(1) 単語学習『DUO Select』(20分): 前回扱った範囲の小テスト、学生どうしの相互採点、回収、新例文8つとそ
の中の単語・熟語のリピート練習。

例文と単語・熟語の一例

例文 6 2

This stream isn't shallow. It's five feet deep.

(この小川は浅くはない。深さが5フィートある。)

含まれる単語・熟語

stream: 小川

shallow: 浅い

foot: 足、フィート

... deep [in depth]: 深さが…⁽¹⁾

『DUO Select』は一冊を学習し終えることで英語検定試験2級取得、TOEIC550～620点達成可能相当の英単語と熟語の力をつけることをうたっており、本校4年次学生にとっては多少歯ごたえのあるレベルだと言えるだろう。前期と同じく一回の授業で8つの例文を進めていくことは適度な負荷であると考えられる。

(2) 音楽(30分): 評価者に評価シート配布、その回のプレゼンテーショングループの発表、曲を流す(2, 3回)、まとめと評価シート回収。

前述したとおり、評価シートを配布する前にプレゼンテーショングループには指定の発表座席に移動させる。評価シートとプレゼンテーションプリントの配布。

実際のプレゼンテーションの日程と曲は以下のとおりである。

プレゼンテーション日程と曲

10/7	ガイダンス
10/14	4 M Aグループ I Was Born to Love You (Queen)
10/28	4 B Bグループ Joga (Bjork)
11/4	4 E Cグループ Let It Be (The Beatles)
11/18	4 M Dグループ Don't Look Back in Anger (Oasis)
11/25	4 M Eグループ Get Back (The Beatles)
12/9	4 C Fグループ Top of the World (The Carpenters)
12/16	4 M Gグループ My Heart Will Go On (Celine Dion)
12/24	4 E Hグループ Sunday Morning (Maroon 5)
1/20	4 E Iグループ Yesterday (The Beatles)

・実際のグループ名はリーダーの名字としたが、ここでは特に明らかにせずアルファベットで示すものとする。

プレゼンテーションにおいては全てをグループに任せるとはならず、教員が教卓に立ちAV機器の操作及び総括的な流れを作る。まずは通して曲を一回流し、その後歌詞の聞き取り箇所を中心に繰り返し聞く。その際、教員が評価者の中からあてて答えさせたり、正答をプレゼンテーショングループに確認していく。難しい聞き取りの部分に関してはあまりこだわらずに流れを大切に正答を確認していく。歌詞聞き取りが終わったら、曲について、アーティスト(バンド)について、感想の順番で作成したプリントに基づいて、発表してもらう。その際、発表する者は一人ではなく、それぞれ分担して受け持った箇所をその該当者が読み上げていくこととする。

曲のバリエーションはかなり豊かだが、ビートルズやカーペンターズ、クイーンなど往年の名曲が多いことが目立つ。4BのBグループが扱った曲は英語ノンネイティブスピーカーの曲だが、それを題材にしようとしたグループの文化的な広がりを知る機会にもなった。またそうしたアーティストがいかに関英語圏で活躍しているかを評価者が知るきっかけにもなり、何よりほとんどの評価者が知らない曲、アーティストだったので、逆にかかなり反応が良かった。

教員のコメントなどを交えて発表が終了したら評価シートの記入を始めさせ、教員に提出させる。プレゼンテーションが終わったグループと提出が終わった評価者は5分ほど休憩を取る。

(3) 映画およびその他(50分弱): 映画鑑賞、台詞の聞き取りとディクテーションもしくは読解教材の内容検討。授業で扱った映画は以下のとおりである。

授業で取り扱った映画とその学習内容

- ・『リトル・ダンサー』(原題: *Billy Elliot*) (英 2000) 冒頭 30 分の鑑賞、読解教材の内容理解。
- ・『ローマの休日』(原題: *Roman Holiday*) (米 1953) 冒頭 30 分の鑑賞、イディオム確認教材の内容理解とセリフの聞き取り、ディクテーション。
- ・『フォレスト・ガンプ/一期一会』(原題: *Forrest Gump*) (米 1994) 冒頭 30 分の鑑賞、イディオム確認教材の内容理解とセリフの聞き取り、ディクテーション。文化背景理解のプリント(KKKについてなど)。
- ・『メメント』(原題: *Memento*) (米 2000) 冒頭 30 分の鑑賞、読解教材の内容理解。
- ・『ノッティングヒルの恋人』(原題: *Notting Hill*) (米 1999) 冒頭 30 分の鑑賞、イディオム確認教材の内容理解とセリフの聞き取り、ディクテーション。

冒頭30分のみ鑑賞はいかなものかという意見もあるだろう。そこでまず、観る場面は切りよくディクテーションなどに有用な範囲で観ることにして、授業で冒頭を見て興味がわいた学生向けに放課後の映画鑑賞会を定期的に実施した。前述したとおり映画一本を授業内で鑑賞すること

は時間的にも無理であり、また教育目的の達成には不十分なのでこのような方策をとった。実際に鑑賞会に参加した学生は多くて 10 人ほどで、個人的に DVD を借りていく学生もいた。

台詞の聞き取りでは、全員がクラス内で鑑賞した部分のみを選び時には学生からの要望が高かった場面にした。

台詞聞き取りとディクテーションの一例

「聞こえる？」()?
 まあ、スリッパを！スリッパを履いてから窓からお
 離れ下さい。
 Oh, and your slippers! Please () () your
 slippers and () () () the
 window. (『ローマの休日』より)
 (各所には、Listen, put on, go away from が入る)

ディクテーションは難易度が高かったと思われるが、適宜教員から頭文字や日本語の意味などのヒントを与えて解答できるようにきめ細かく指導し、多くの場面を扱わずできるだけ集中して短い場面でのディクテーションをするようにした。また本校 3 年次まで指導の主眼としていた音読の側面から、そして実際の会話でも応用できることの意識付けとしても、穴埋めが終わったあとには必ず音読(リピート)をするように心がけた。

定期試験では音楽、映画の以上の内容に基づいて出題した。また『DUO Select』では冬季休業明けと学年末試験前にまとめテストを実施した。

4.2 評価シートの結果

表 3 で示したように、発表原稿についての①工夫、②歌詞の穴埋め箇所の適切さ、③協力度、発表態度についての④声の大きさ、⑤内容を効果的に伝えているか(各項目 1～3 点、総合 15 点)が評価シートで採点される。これら合計 15 点を 3 点換算として平均値を出し、平常点の 6% (100 点満点中の 6 点分) に組み入れた。どのグループも 4～5 点は取っていたが、主に声の大きさなどの発表態度で評価の差が出たようである。

自由コメントでは発表内容についてというより曲自体に対しての感想が多かったことが共通項だった。その中でも「聞いたことのある曲だったが歌詞を知ることができて良かった」というものが最も多かった。発表内容については、原稿のまとめり方について、次に発表態度についてが多かった。次に聞き取り箇所の適切さについては自分たちの聞き取りに直結することなので、比較的細かな指摘が多かったようである。

(評価シートのコメント事例)

- ・とても良く聴く曲で、訳が知れて良かったです。
- ・長すぎず短すぎずわかりやすくまとめてあり、よかったと思う。

- ・話す声が大きくてはっきりしていて良かった。
- ・穴埋めの難易度がバランス良くしてあった。
(原文のまま。一回目のプレゼンテーションに対して)

学生によっては、コメントが「良かった」「楽しかった」など短めだったりあまり考えたあとが見られなかったりしたが、発表態度の細かい点(話し方やペースなど)や原稿の言葉遣い(話し言葉の使用は望ましくないのではないかなど)についてかなりしっかりと評価をしている様子がかがえるコメントも多かった。

5. 授業終了時のアンケート結果

授業終了時(答案返却時)にごく簡単な授業アンケートを教員が作成し、今後の授業の改善に役立てたい旨を説明して回答に協力してもらった。参加学生はコース受講者全員のうち欠席者をのぞく 34 名であった。質問項目は以下のとおりである。

授業終了後アンケート内容と結果

4 - [] 科 () 号 : 氏名 _____

英語Ⅳ 後期「映画・音楽コース」(岩下担当) アンケート

*以下の質問に当てはまるものを○で囲んでください。

I. この授業の中で英語力増強のため一番役立ったのは

1. DUO Select (単語) 2. 歌 3. 映画
 具体的な理由 (任意) _____

II. 一番興味深かった・楽しかったのは

1. DUO Select (単語) 2. 歌 3. 映画
 具体的な部分・曲・作品 (任意) _____

III. この授業を通して映画や音楽に対して

1. 関心が強くなった (関心を持つようになった)
 2. 関心が薄くなった (関心がなくなった)
 3. 変わらない

具体的な理由 (任意) _____

IV. 映画のせりふや歌詞のリスニングを通して英語力が

1. 高くなった 2. 低くなった 3. 変わらない
 具体的な理由 (任意) _____

V. 曲についてのプレゼンテーションをすることは

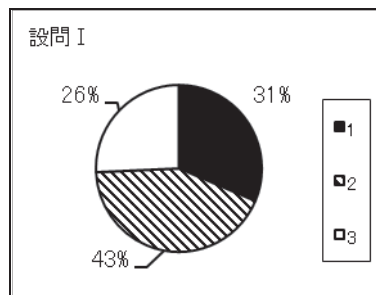
1. 有意義だった 2. 有意義ではなかった
 具体的な理由 (任意) _____

VI. 曲についてのプレゼンテーションを評価することは

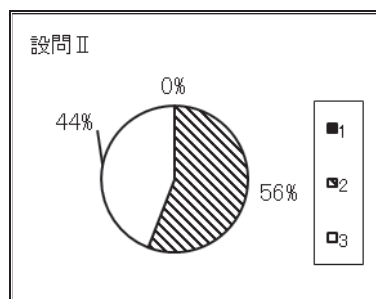
1. 有意義だった 2. 有意義ではなかった
 具体的な理由 (任意) _____

アンケート集計結果

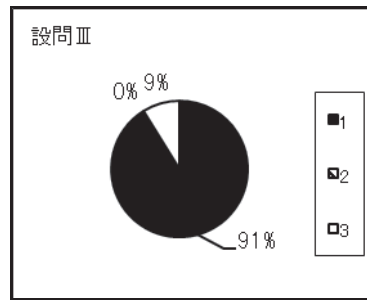
- I. 1…11名、2…15名、3…9名
 II. 1…0名、2…19名、3…15名 (重複回答あり)
 III. 1…31名、2…0名、3…4名 (重複回答あり)
 IV. 1…13名、2…0名、3…11名
 V. 1…25名、2…9名
 VI. 1…23名、2…11名



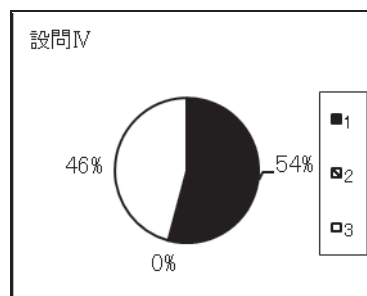
1. DUO : 語彙力増強につながった、単語をたくさん覚えられる、毎週新しい単語に触れられる、など。
 2. 音楽 : いろんな歌が聴けて、音楽の幅が広がった、リスニングの力が上がった (4名)、英語が楽しいと思える、など。
 3. 映画 : 日常の中で使えそうだから、聞き取りがよくなった、など。



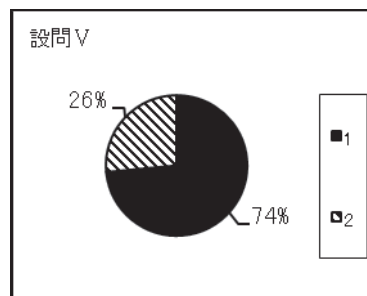
2. 音楽 : Top of the World, Billy Jean (教員が最後の授業で準備したもの)
 3. 映画 : 『ローマの休日』、『メメント』



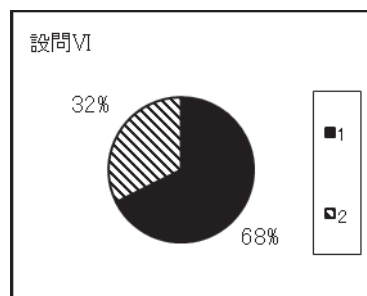
1. 関心が強くなった : 初めて見て、こんな作品もあったんだと思い色々見てみたくなったから、吹き替えでなく字幕で見ようと思った、英語の歌がおもしろかったから、など。



3. 変わらない : 歌詞はなんとかできたが、映画のセリフはほぼ聞き取れなかった、表現が独特だったので、など。



1. 有意義だった : 歌詞の意味に触れる機会になったので、楽しかったから、何度も曲を聞いたり、勉強になった、など。
 3. 有意義ではなかった : プレゼンをやっていないので、むずかしかった、など。



1. 有意義だった : 自分の知らない洋楽を聞けるのはよかった、など。
 2. 有意義ではなかった : 英語とは関係ない気がしたので、ちゃんと評価受けているのかわからない、など。

以上のコメントについては原文のままである。コメントをかなり詳しく書いている学生もいたが、半分ほどの学生は項目についてのみ印をつけ、コメントは一切なしだった。

6. 分析と考察

以上、授業の実際の流れとアンケート結果を見てきたが、それぞれを関連付けながら分析して考察へと進めたいと思う。

まず『DUO Select』についてはアンケート結果を見ても「楽しい」という感想には全くつながらなかった（設問Ⅱ）が、有意義な学習ができたという実感があつたようである（設問Ⅰ）。特に学生との面談でわかったことは進学希望の学生ほど系統立てた単語・熟語の学習を授業でやりたいと切望しているという点であった。『DUO Select』だけでなく映画や音楽でも単語・熟語に多く触れることができたのはこのコースの良い点の一つだったと自負している。同時に主眼としている「映画・音楽」から離れすぎることがないように、単語学習に授業でかける時間は最小にしているが、小テストとまとめテストの実施により自主学習を促せたものと考えられる。

次に音楽だが、これはやはり取っつきやすさも手伝って学生の反応は非常に良かった。映画はある程度の長さもあり実際の台詞の聞き取りとディクテーションにハードルの高さを痛感した学生も多かったようだが（設問Ⅳ）、音楽はある程度身近に、そして時に平易さを感じながら学習できたようだ。学生の反応で顕著だったのは、リスニング力の向上よりも未知の曲やアーティスト、バンドを知ることができたという点（設問Ⅲ、Ⅳ）であり、その点では英語学習における文化背景的部分を音楽が大きく担っていたとも言えるだろう。また本校の学生がそうした文化学習に対してある程度の欲求を持っていることも実感した。実際のプレゼンテーションでは、危惧していたことではあるが原稿提出がぎりぎりであったり、提出されたファイルに入っていた原稿の体裁が整っておらず教員が訂正したり、曲が入っている媒体をお互い任せにしていた結果持参していなかったり（この際にはたまたま教員がプロモーションビデオのDVDを持参していたので代用できた）ということが起こった。発表中には教員が司会のようなスタイルで流れを取りしきったが、歌詞の聞き取りの際、プレゼンテーション担当グループが誰も正答がわからない、という珍事もあったが教員がサポートして事なきを得た。9グループがすべてスムーズに行くということとはなかなか難しいことではあるが、お互いの協力や締め切りに合わせてプレゼンテーションの準備をすることは英語のみならず広い意味での学習の機会になったと思われる。プレゼンテーションを有意義だったと考える学生が多いのも、それが大きな原因の一つだろう。しかしその一方でプレゼンテーションと英語が関係ないのでは、との貴重なコメントもあつたし、評価に

対する鋭い指摘も見られた（設問Ⅵ）。プレゼンテーションの評価シートは各グループに直接見せることはなく、また結果も大体の点数（6点満点として、○点というぐらい）しか伝えていなかったが、これは集計作業が煩雑でありグループに対して毎回明示することが困難だったことが大きな原因であった。今後はもう少し評価シートを簡略化・明確化してグループに対して評価の実際を差し支えない程度の範囲で示す必要があるだろう。

映画については、当初大方予想していた通り学生は観たことがない映画ばかりだったのでかえって興味をそそられて鑑賞することができたようである（設問Ⅲ）。放課後映画観賞会は盛況とは言えず時には「自分が好きな映画だったから」という理由でコース外の学生が出席していることもあったが、学生が映画を鑑賞するという点において実施した意義は大きかったと思う。また映画で生の英会話に触れる、という目的も学生側も実感してくれていたようである（設問Ⅰ）。もちろん週一回の授業の中だけでの限られた台詞のディクテーションでは飛躍的にリスニング力が伸びることは難しいだろうが、今後の洋画鑑賞と英語学習の関連付けとしてもこのコースが一助となればと考える。学生によっては、今後字幕で映画を楽しみたいと考えている者もおり（設問Ⅲ）、普段吹き替えでしか映画を観ない、という学生も細かく一場面を聞きとり、音読することで意識が変わったように授業で感じられた。

最後に本文では特に詳しく述べなかった定期試験について触れておく。定期試験では学生がプレゼンテーションを実施した曲も範囲とした。曲の聞き取りも出題したが、学習している学生としない学生との差が歴然だった。特にコースにおける一回目の定期試験となる後期中間の成績は、不慣れな部分もあつてか学年末よりもかなり低い結果になった学生が多く、後期中間のコース平均点は100点満点中59点だった（学年末は85点ほど）。本校3年次まで、また4年次前期では曲や映画の聞き取りという形式の試験は皆無だったといえるので、この試験形態に順応することがスムーズだった学生ほど試験で高得点を得ることができたのではないだろうかと考える。

最後に、アンケート結果では映画・音楽に対して興味が強くなった、と答えた学生が多く、また映画・音楽に対して関心が薄くなった（関心がなくなった）学生、また映画の台詞や歌詞のリスニングを通して英語力が低くなったと答えた学生が一人もいなかったことは教員として今後の励みになった（設問Ⅲ、Ⅳ）。

7. 今後の課題

こうした分析と考察を踏まえて、現在も継続開講されている英語Ⅳ（後期）「映画・音楽コース」の課題を考えていきたい。コースの主眼となっている音楽、とりわけプレゼンテーションの分野で提起された問題点は早急に対処する必要があるだろう。まず評価がきちんとなされていること

参考文献

- (1) 鈴木陽一：「DUO Select—厳選英単語・熟語 1600」, ア
イシーピー(2008).

の確認である。前章で考察した通り、今後は評価シートの結果をできるだけ簡略化・明確化しさらに自由コメントのスペースを曲自体についてと発表そのものについてに分けてさらなる建設的な意見を求めて、プレゼンテーショングループの反省につなげていきたい。またできるだけ早めに評価シート内容を整理して該当グループに対して渡した後にそれを踏まえての反省レポートを作成することを有意義な方策として考えている。

次に、本稿で取り上げたプレゼンテーションでは教員のサポートがあったが、今後は教員のサポートなしで自分たちでAV機器の操作も含んですべてのプレゼンテーションを30分の中で実施してもらう。タイムマネジメントについても評価の項目をつくりたい。それに伴って学生にとってのプレゼンテーションの負荷は必然的に高くなるので、平常点の中でのプレゼンテーション評価の部分を大きくしたいと考えている。

実施教室は一階合同講義室を例年使用してきたが、教壇と学生の座席が遠く、若干授業が散漫にならざるを得ない部分がある。またディクテーションなどには個々のPCを備え音声教材配布システムが完備されているCALL教室が最適であるので、22年度はCALL教室で学生一人一人が各PCで音声、映像を繰り返し再生できる環境を実現している。映画の鑑賞においても大型のスクリーンと学生PCのモニタの両方を備えており、音響も一階合同講義室と大きな差はないものとする。

定期試験に関しては学生の不利がないように、また音楽・映画の聞き取りに習熟できるように可能な限り放課後などに教員立会いの下CALL教室を開放して学生の自主学習を促したい。また、特にプレゼンテーションで扱ったリスニング素材の出題に関しては細心の注意を払い、難易度設定などを例年の定期試験データなどを元におこないたい。

さらに展望として、英語の学習形態としてプレゼンテーションは積極的な英語学習への姿勢や興味などの良好な結果を生み出すと思われるので5年次、さらに専攻科にてプレゼンテーションを深めて指導していきたいと考える。その際には映画・音楽というジャンルだけでなく、卒業研究や専門的内容に関する事項を英語を用いてプレゼンテーションしていくという英語を使った主体的な活動にしっかりとつなげることができればと考える。そのためには、まずは楽しさ・未知を知る喜び、英語への親しみを見出しやすい映画・音楽というジャンルで学生にきっかけづくりをしてもらいたい。また本コースが持つ英語圏の文化学習という要素も、世界に羽ばたいていく高専の学生にとって大いに有益であるというのも英語Ⅳ(後期)「映画・音楽」コースを受け持ってきた中での思いであるので今後も現在まで培った成果を生かしながら授業を展開したい。

(平成22年9月27日受付)